

## アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献 した人々 (3) ～バーサ・マホーニー・ミラー①～

金山愛子

世界で初めて公共図書館内に児童部門が設けられたのは19世紀末のアメリカにおいてである。そこから子ども達によい本を手渡すことを考えた人々の活動とネットワークがアメリカ全土に広がっていき、1920年代から1930年代にかけてアメリカは絵本の黄金時代を迎える。1906年からニューヨーク公共図書館児童部門の主任を務めた図書館員アン・キャロル・ムーア(Anne Carroll Moore, 1871-1961)の活動を、図書館員としての仕事、図書館員の育成と編集者や作家への影響、批評という3つの観点から前2稿で論じた。<sup>(1)</sup> 本稿では、同じ時代に子どものための書店を運営し、アメリカ初の子どもの本の批評誌を刊行したバーサ・マホーニー・ミラー(Bertha Mahony Miller, 1882-1969)の生涯とその業績を伝記や彼女の書いた文章、彼女と共に仕事をした人々の言葉から浮き彫りにし、その子どもの文学普及への貢献について考えたい。<sup>(2)</sup>

JBBY (Japanese Board on Books for Young People, 日本国際児童図書評議会) の創立40周年記念特大号への寄稿文に、編集者、絵本研究家でアジアから初のIBBY (International Board on Books for Young People, 国際児童図書評議会) 会長を務められた元JBBY会長の島多代氏が次のように記している。

1970年代、まだ子どもの本の重要性が認められていなかった日本で、国際的な子どもの本の世界への第一歩を踏み出された渡辺茂男氏や猪熊葉子先生の見の明と実行力に頭が下がります。さらにその40年前の1930年代に、石井桃子さんが丸善[ママ]の書棚で“realms of gold in children's books”を見つけられ、それが後年、日本の子どもの本の出版へとつながるきっかけとなりました。ここに先人たちの叡智と実行力に深い感謝の念を捧げたいと思います。(『Bread and Book』, p.25)

石井桃子 (1907-2008) が手にしたこの本の著者は、児童書の専門店

「少年少女のための本屋」(The Bookshop for Boys and Girls)の創始者であり、後に『ホーン・ブック・マガジン』(*The Horn Book Magazine*)の編集者、ホーン・ブック社(The Horn Book, Incorporated)の社長となったバーサ・マホーニー・ミラーと同僚のエリナー・ホイットニー・フィールド(Elinor Whitney Field, 1889-1980)であった。日本における子どもの本の普及の根底に、ミラーを師と仰いだ石井とミラーの友情と、ミラーを通して石井が知り合った図書館員たちとの交流と学びがあったと言っても過言ではない。バーサ・マホーニー・ミラーとはどのような人であったのか。本稿と次稿ではその生涯と業績を検証するが、本稿では彼女の初期の仕事の中から「少年少女のための本屋」と『子どもの本のなかの黄金の国』(*Realms of Gold in Children's Books*)におけるその貢献を考察する。

## 1. バーサ・マホーニー・ミラーの生涯

バーサ・マホーニーは、1936年7-8月号の『ホーン・ブック・マガジン』(以後『ホーン・ブック』)に「今日のアメ리카における子どもの本」と題する論考を掲載した。この時期は二つの世界大戦の戦間期にあたり、大恐慌の打撃から社会全体が完全には抜け出し切れない時期である。バーサは明晰な鮮やかな印象を残す文章で、戦間期における価値観の転換と混乱の中で、子どもの本の中にこそ嘘のない真実な価値観が見つかること述べる。その文章を原文で見よう。その下に拙訳を付した。

In America, as in other countries these days, human affairs are bewildering and depressing. Everywhere we look in vain for a true sense of values. But in one place true values are to be found. That place is in children's books. This rich and colorful stream, covering every kind from picture books and folk and fairy tales to books about the universe, is unique in this country. It is made up of genuine pieces of artistic effort in which the arts of writing, illustrating and book-making have united to create a whole capable of giving joy not to children alone but to all ages. Because of its genuine and sound values, this stream is like a crystal-clear mountain brook.

近頃では他国と同じくアメリカでも、人間をめぐるさまざまな事柄にはとまどいを覚えまた憂鬱になる。どこを見ても、真実な価値観というものが見当たらない。しかし、一つだけ真実な価値観の見つ

かる場所がある。その場所とは子どもの本の中である。この豊かで色鮮やかな流れは、絵本から昔話、フェアリーテール、そして宇宙に関する本に至るまで、この国ならではのものである。これは純粋な一つひとつの芸術的努力から成っている。文を書き、挿絵を描き、本を装丁する様々な芸術が一つのまとまりへと作られ、子どもだけでなく、年齢を問わずすべての人々に喜びを与えるのである。その純粋で健全な価値観ゆえに、この流れは水晶のように透明な山のせせらぎに似ている。<sup>(3)</sup>

第一次世界大戦が終結し、復興への歩みを進める中で大恐慌による経済や暮らしへの大打撃からなんとか抜け出そうとするアメリカにおいては、社会全体として経済の再建が最優先課題であった。質よりは量を、丁寧な仕事よりは効率的な仕事を、芸術よりは娯楽をとという何か浮足立った社会の流れの中であって、子どもの文学の中にのみ濁りのない健全な良心とも言える意識をバーサは見出していた。バーサがこのような見解を持つに至ったのはどのような仕事を通してだろうか。彼女の経歴を見ていこう。

バーサ・マホーニー・ミラーはアン・キャロル・ムーアと同じアメリカ東北部ニューイングランド地方の出身である。1882年マサチューセッツ州ケープアンのロックポートにアイルランド系アメリカ人を父とする家族の長女として生まれた。1902年にシモンズ・カレッジに入学、1906年にボストンの女子教育労働組合の秘書補の仕事に就いた。1916年、組合の一部門として「少年少女のための本屋」(The Bookshop for Boys and Girls)を始めるよう理事たちを説得し、経営にあたる。1924年、本屋の共同経営者であったエリナー・ホイットニーとともに『ホーン・ブック』を創刊し、1950年に退くまで精力的に編集の仕事に携わる。1936年、ビジネスマンであったウィリアム・デイヴィス・ミラー (William Davis Miller)と結婚し、経済的な基盤の安定を得て、ホイットニーと共に書店の経営から退き、『ホーン・ブック』刊行の責任を負う。1951年から1963年までホーン・ブック社の代表となり、その後1969年に亡くなるまで会社の理事を務める。(Ross, pp.1-2)

書店経営と『ホーン・ブック』刊行を両立させていたバーサとエリナーの二人が、石井が手にした800ページにわたる『子どもの本のなかの黄金の国』(*Realms of Gold in Children's Books*, 1929, 以後『黄金の国』)を編集したのは偉業と言える。本書はこれまでに本屋で出していた推薦図書リストをもとに『ホーン・ブック』刊行で得た知識と技術を駆使して編集したも

のだが、着手から1929年の出版まで2年かからずに成し遂げた。さらに1930年には二人で『現代の子どもの本のイラストレーター』(*Contemporary Illustrators of Children's Books*)を出版する。1936年には『黄金の国』の補遺



バーサ・マホーニー・ミラー

となる『子どもの本の五年間』(*Five Years of Children's Books, 1930-1935*)という同じくらい分厚い本を出す。石井が買ったのはこの2冊であった。石井桃子の『児童文学の旅』にはミラーとの交流やミラーを通して知り合った人々との交流がいきいきと描かれている。ロックフェラー財団の奨学金を受けて留学した1954年と1961年のアメリカへの旅の手記でミラー夫人との出会いや一緒に過ごした日々のことを記す中で、石井はこの友人と知り合ったきっかけを回想している。島が日本における子どもの本の出版の原点となったと考える出来事である。

考えてみると、このひとと知り合うようになったのは、ほんとうにふしぎな縁からであった。当時から二五年ほどまえのある日、私は東京の教文館の本棚をながめていて、『黄金の国』"Realms of Gold"と『子どもの本の五年間』"Five Years of Children's Books"という二冊の分厚い本を見つけた。本の著者は、Mahony and Whitneyとなっていた。中を見ると、注釈づきの子どもの本の図書目録で、本の解題やその著者についての説明は、懇切明快。ところどころにカット風に入っている挿絵も、じつに本格的なものであった。

児童文学史と挿絵の歴史を兼ねているようなこうした図書目録を、私ははじめて見たので、とてもうれしくなり、お金がたりなかったので、まず前巻を買った。お金ができてから、また教文館にいったみると、他の一冊も売れないで残っていた。(石井、pp.83-84)

さらに1944年にはポール・アザールの『本・子ども・大人』の翻訳をホーン・ブック社から出版する。その他、『現代の子どもの本のイラストレーター』よりもさらに大きな枠組みでイラストレーターを紹介した『子どもの本のイラストレーター：1744—1945年』(*Illustrators of Children's Books: 1744-1945*)を1947年に出している。

これだけ精力的に大部の図書目録を出版していったバーサ・マホーニーとはどのような人であったのか。夢見るような眼をした若い頃の写真とは少し印象が違うが、とても活力に満ち、豊かな発想力をもち、それを実行に移す実行力を持った人であった。また穏やかな人柄ゆえに、人々からの賛同や支援を受けていたようである。その誠実さと、人への温かい関心がその成功の鍵であったように思われる。バーサのもとで働いたユーラー・シュタインメッツ・ロスによる伝記からはそのような人柄が浮き立ってくる。この伝記の中でロスや人々がバーサを形容する言葉の主なものをもとめると、「創造的な」、「疲れを知らないほどエネルギーな」、「いつも新しい友達を作っている」、「想像力に富んだ洞察力」、「熱意」、「子どもの本に関する知識の豊かな」、「小柄な」、「あっちにもこっちにもそっちにも飛び出していく」、「一流のビジネスウーマン」、「人を魅了する」、「周到な」等が挙げられる。長年の同僚であったエリナー・ホイットニー・フィールドは彼女を「青い目をしてバラ色の頬をした機敏で小柄な女性」で、「清潔な空気、海の風と広い水平線のオーラ」があったと記す（Ross, p.67）。また石井の文章からは、「ミラー夫人」が彼女のために第一回目の旅程を考え、各地で出会うべき人に会い、見るべきものを見られるようにと計画し、事前に各地の知り合いに連絡をするという配慮をしてくれたことがわかる。カナダの図書館員リリアン・スミス（Lilian H. Smith）を訪ねに行く石井との別れ際に、「私は、デモンストラティブ demonstrative な人間じゃないのよ。だから、自分の思っていることをうまくあらわさなかったとしたら、ごめんなさい。」（demonstrative とは「感情をはっきり表にあらわす」の意。石井、p.32）と言ったその言葉からは、年若い外国からの訪問客に対等に接する70歳を超えたバーサの感受性豊かな優しさが感じられる。石井はその特有のユーモアで彼女の旅を綴っている。アン・キャロル・ムーアは恐れ多くてなかなか連絡できずにいたが、会ってみると気さくな人で当時80歳を超えていたが、ニューヨーク市内を案内してくれたり、ごはんを作ってご馳走してくれた。ムーアに“you”と言われると、どうしても「おまえさん」と言われている気がしたと石井は記している。このようなムーアと「ミラー夫人」が、図書館員や書店員、雑誌編集者という仕事の第一線から退いていたとは言え、日本からの訪問客が児童図書館や子どもの文学について学べるように誠意を持って迎えたのは、子ども達によい本を届けたいという願いを生涯にわたって持ち続けたからであろう。

若い頃からバーサを知る人は彼女をどう評価しているだろうか。インディアナポリスの書店経営者で後にニューベリー賞とコールデコット賞を

創設したフレデリック・G・メルチャー (Frederick G. Melcher, 1879-1963) は、バーサのことを、「彼女は偉大さを恐れず」、「言葉を尊重し」、「子どもの文学の高潔さを維持するために多大な貢献をした」と称えている (Melcher, p.279)。このようなバーサの思想とその思想を育てた経験については第4章に譲ることとし、次に彼女が最初に手掛けた大きな仕事である書店経営について詳しく紹介する。

## 2. バーサ・マホーニーの始めた書店

1916年秋にバーサ・マホーニーはボストンの一角に子どもの本に特化した書店を開店した。彼女が「少年少女のための本屋」(The Bookshop for Boys and Girls) を始めた理由は何であろうか。特に子どもの頃からたくさんの本を読んで育ったという訳ではないようだ。むしろ職業選択として書店経営を選び、その後子どもの本について一から学ぶという道を進んでいる。すなわち、『アトランティック・マンスリー』(1915年8月号)に掲載されたアール・バーンズの「女性のための新しい職業」を読んだバーサは、書店経営に興味をもった。バーンズは教育、図書館、社会福祉の世界に入らなかった女性たちこそ書店経営にふさわしいと述べた。直観的にバーサはこれこそ自分の使命であると感じたようである (Ross, pp.38-39)。

書店経営には1906年から働いていた女子教育労働組合 (The Women's Educational and Industrial Union) での経験が大いに活かされた。<sup>(4)</sup> この組合は女性解放運動の指導者ハリエット・クリスピーの呼びかけのもとに集まった女性たちにより組織された非営利団体で、女性同士の交流を深め、女性の教育、労働、社会的地位を促進させることを目的とするものだった。バーサの場合、就職への道は平坦ではなかった。シモンズ・カレッジ卒業後、彼女は故郷ロックポートの会社でしばらく働いた後、ニューライブラリーという書店の店員としての職を得るが、彼女の年齢のせい、マホーニーというアイルランド系の名前のせい、経験が浅い者への偏狭さのせい、上司がバーサに辛くあたり、彼女はその職を辞した。しかしこの書店の人的つながりから女子教育労働組合の秘書補の仕事に就き、組合の財務部長であったヘレン・パース夫人から慎重な財務管理を学んだ (Ross, p.35)。バーサには財政的な基盤がなかったため、彼女の書店は組合が経営するものであったが、財務管理の知識と経験はおそらく書店経営の面で大いに役立ったと思われる。さらに彼女は組合の諮問機関での会議の議事録をつける業務を通して、ボストンを代表する有識者の考えに触れ、女性や子どもの福祉向上のための組合の取り組みの全体像を把握する

ことができた。このような経験も、多様な考え方に触れ、今何が必要とされているかを考えるという面から、書店経営に活かされたに違いない。組合の事業に積極的に関わっていたバーサの発案で、組合では子どものための劇を上演することになった。そのためにバーサは生まれて初めて1910年代から開花し始めた子どもの文学の領域に足を踏み入れた。4年間続けた子どもの劇上演のための脚本探しをとおして、バーサらは、子どもに必要なのは劇場ではなく、本であるという認識に至るのである (Ross, p.38)。子どもの頃の、短かったとしても確かな愛の中で「感じる心」を育てられた家庭環境、シモンズ・カレッジで受けた事務的トレーニング、ニューライブラリーでの本を扱う仕事、組合での管理経営を間近に見て知った経験、有識者の考えに触れ得たこと、子どもの劇上演のために子どもの文学の世界に足を踏み入れたこと、こういったそれまでの人生の多くの経験が「少年少女のための本屋」に結実したことになる。

書店経営と言っても財政的な基盤のないバーサは、書店経営を組合の一事業として始めることについて上司からの支持を得、理事会から了承を取りつけなければならなかった。若いバーサの事業案が認められたのは、書店経営が自立を目指す女性に適した仕事だったことに加えて、4年間にわたる子どものための劇上演の成功が認められたのであろうし、また組合には若い職員の発案に耳を傾けるだけの度量の大きさがあつたのであろう。1916年秋書店の開店にむけて、バーサがしなければならないことは山ほどあった。自分の思いどおりの店舗になるような場所の獲得や、店員のトレーニング、出版社への本の発注業務、ボストン地域を超えた本の領域に関する研究の他に、バーサは子どもの文学を学び、顧客が本を選ぶ際の参考になるようにと選書リストを載せたガイドを作った (Ross, p.50)。

子どもの文学について学ぶということそれ自体が時間と労力のいる仕事であったが、バーサは素直に先達の教えを請うた。彼女が師事したのは、組合の子どもの劇上演用の資料を探していた頃に知り合いになった、ボストン公共図書館児童部門部長であった図書館員アリス・M・ジョーダン (Alice M. Jordan, 1870-1960) であった。ジョーダンはブックリストとしてキャロライン・M・ヒューインズの『少年少女のための本』とクララ・ホワイトヒル・ハントの『少年少女のための本棚』をテキストに選び、前の週に課した本について二人で話し合うというチュートリアル形式で教えた。ジョーダンとの学びをとおして、バーサは彼女の書店には子どものための最良の文と絵しか置かないことを決意した (Ross, p.50)。経営面から考えると、売れる本が必ずしもよい本とは限らないことが昨今の出

版事情を見ても容易に想像できる。「子どものための最良の文と絵しか置かない」という決心を実現するためには、よい本を売るための数々の企画を考案し続けなければならなかっただろう。書店に置く選書リストはそのような工夫の一つである。リストは単なる出版物を紹介するものではなく、本屋の理念を反映させるものであるとパーサは考え、リスト作成には細心の注意を払った。そのような経緯で出来上がったのが、110ページで1200冊の本を紹介する「少年少女のための本—購入お薦めリスト」(*Books for Boys and Girls---A Suggestive Purchase List*, 1916) である。このガイドは1922年までに4刷印刷されている。それにしても、書店経営という道を知ったのが1915年の夏であったことを考えると、わずか一年で1200冊もの本を紹介するリストを作ったのであるから、人並み以上の努力があったことが窺える。パーサはジョーダンという良き師に恵まれ、その期待に応えたのである。この良き師にパーサは、書店の書棚を埋める際にもアドバイスを求め、彼女を書店の顧問に任命したのであった。その後ジョーダンは書店経営と『ホーン・ブック』発行の両面でパーサを支え続けることになる (Eddy, p.61)。

また、書店の開店に先立ち、アメリカ各地で子どもの本の世界で働いている先達から教えるを請うためにパーサは旅に出る。最初に訪れたのが、インディアナポリスで書店を経営していたフレデリック・メルチャーであった。彼の書店を見学し、書店経営の手法を学ぶためであったが、ここから生涯にわたるメルチャーとの友情が始まった。メルチャーはパーサをアメリカ書店協会のシカゴ大会に連れて行き、重要人物達にひき合わせた。その一人が当時アメリカ図書館協会で「ブックリスト」編集の仕事をしていたメイ・マッシー (May Masee, 1881-1966) であった。後にこのマッシーが彼女の『黄金の国』を出版してくれることになる。

その後パーサはニューヨークを訪ねるが、ニューヨークと言えばもちろんアン・キャロル・ムーアのニューヨーク公共図書館の児童室を見逃すことはできなかった。児童室を訪れたパーサはその温かく人を迎える雰囲気を感じると本屋でも再現したいと思った (Ross, p.53)。ムーアに会ったパーサは彼女の計画を話した。ムーアは注意深くその計画に耳を傾けたが、その計画に賛同することはなかった。自分の目で見て確かめるまでは支持を留保するというのは彼女らしいとロスと言う (Ross, p.53)。ムーア自身、後に書店の成功について懐疑的であったことを告白している。しかし、これもとてもムーアらしいと思うのだが、実際に書店がオープンした年のクリスマスにムーアはヒューインズと書店を訪ね、自分の疑いがすべ



て取り越し苦労であったことを認めた。その後、ムーアは書店経営面に限らず、バーサの力強い支援者の一人となったのである。この他ニューヨークでは、ジョーダンと勉強した折に使用したブックリストの編纂者のハントや、ヒューインズのこともコネティカット州ハートフォードの図書館に訪ねた。

1916年10月8日、「少女少女のための本屋」はオープンした。開店当初から熱心な協力者に恵まれたのは、バーサの熱意と人徳によるものであろう。組合関係者で書店運営を手伝ってくれたマーガレット・E・セイワードはプロのストーリーテラーであったし、アルマ・W・ハワードは書店業務を引き受けるにあたってわざわざシモンズ・カレッジで子どもの文学に関する夏期講座を受講した上で仕事に臨んだ (Ross, p.50)。セイワードはこの書店の設計の隅々にバーサの意匠が感じられたと語っている。書店は張出し窓のある長い部屋だったが、壁に沿って低い本棚が取り付けられ、その上の壁には展示のスペースがあった。中央には巨大な机が置かれ、その上にたくさんの本が並べられていた。さらにセイワードは、この訪れた人を歓迎する雰囲気のある部屋には、この書店を作った魅力的な人の温かい精神が感じられたと述懐している (Sayward, p.299)。バーサは本屋の存在意義を「ただ単に子ども達によい本を売るのではなく、本への愛を育てること」とし、二つの重要な要素は子ども達の中に「真実に考える力」と「深く感じる力」を育てることであると、1917年のアメリカ書店協会のニューヨーク大会でのスピーチで述べている (Ross, p.57)。

しかし残念なことに、開店後すぐ同年11月にはライバルとなるガーデンサイド・ブックストアがすぐ近くに開店した。「少女少女のための本屋」は組合の建物の2階にあり、ガーデンサイドは別の建物の1階にあったため、バーサの本屋は不利な立地にあった。しかしその立地の不利を補うような活動をバーサは展開した。子ども、若者、大人、学校図書館員を対象としたストーリーテリングや読書会などのプログラムである。書店員でストーリーテラーのセイワードがストーリーテリングの中心となったが、ヨーロッパから訪れていたマリー・シェドロックを招いて語ってもらったこともあった (Ross, p.57)。何といてもバーサの店の特質は販売員の質の高さであろう。彼女らは「活発で想像力豊かな人々」(Ross, pp.64-65)であった。バーサと二人のアシスタントは、最初の準備から関与していたため、書店で扱う本をすべて知りつくし、おもしろいと思い、他の誰かにも読んでもらいたいという思いがあったので、本の内容についてしっかりと説明することができたのである。そこでは子どもたちは本を購入する前

に、じっくり本を読むことができた。それは書店員が忍耐強く子どもが自分の本を見つけるまで待っていたからである。その仲間にボストン美術館を退職後にミルトン・アカデミーで教えていたエリナー・ホイットニーが加わったことはバーサにとってまさに天の配剤であったと言えよう。エリナーは創造性に富み、手先の器用な人だった。また機知とユーモアのセンスがあり温かい人間性をそなえていた人で、二人は友情をはぐくみ、この後の活動を共にすることになる (Ross, p.68)。

しかし立地条件の悪さからこの書店は、どんなに内部での工夫があっても収益を上げることはなかった。赤字が5年も続いていたのである。そこで組合はガーデンサイド・ブックストアの入っていた建物を買収し、同じボイルストン・ストリートに今度は1階に大きなスペースの書店を構えることができた。子どもの本だけでも劇的に出版数が伸びる時代に入り、新刊に対応できるだけのスペースが必要になったためである。さらにバーサは、大人の本も販売することで収益が見込めると考えた。こうして子どもの本だけでなく大人の本も扱う新しい本屋として「少年少女のための本屋」は1921年秋にリニューアル・オープンした (The Bookshop for Boys and Girls--With Books on Many Subjects for Grown-Ups)。子どもの本だけでなく大人の本を扱うことの思想的な根拠に、子ども達を文学の本流から切り離すことは望ましくないとのバーサの考えがあった。子ども達は自分が読んでいる文学がどんなに深く豊かな源流からきているのかを感じとる必要がある。そして望めばその源流に触れることができるとはいはずである、とバーサは考えたのである (Ross, p.79)。

再開した書店は経営面では最初から成功だった。内容面でも年々充実していった。高校生用のサービスを始め (1924年)、大人が子どもや教育について学び語りあう部屋を設けた (1925年)。また、大人用と子ども用の図書室も併設し (1926年)、古くなった本はセール品として書店で売った。これはお金をあまり持たない子ども達に好評だった。いわゆるギャラリーはなかったが展示も充実させた。ピーターシャム夫妻のオリジナルのイラストレーションの展示からはじめ、イギリスおよび1920年代、30年代アメリカの挿絵画家の作品を展示した。この中にはレズリー・ブルックやピアトリクス・ポター、ワンダ・ガアグ、ドーレア夫妻が含まれる。<sup>(5)</sup>その他、ボストン在住アーティストによる子どものポートレート展示や、子ども自身のアートショーを企画し、1930年から34年までの5年間、高校生のための詩のシリーズを開き詩人を招いて詩の朗読を聞いた。このシリーズでは、ロバート・フロストやT・S・エリオットまでもが招かれ

た。この他子どもの本について学びたいと思っている母親を対象に編集者を招いて講演してもらったこともあった (Ross, pp.78-86)。高校生向けのサービスを充実させた背景には、高校時代が読書を続けるかどうかの分かれ道であるとバーサが認識していたからである。このように本屋は本を置いておけばよいと考えるのではなく、積極的にお客を店に導き入れる企画や、年齢に合わせた企画を考えた。これらの活動は、その背後にある「その子にぴったりの本を」という哲学に支えられていた。

書店内で数多くの活動をするのと同時に、新しいアウトリーチプログラムも始めた。「少年少女のための本屋」はトラックに本を積んで地方を回るブックキャラバンを始め、地方の諸機関に本のコレクションを送り展示することもあった。ブックキャラバンは2年ほどで打ち切りになってしまうが、これらの活動は子ども達がリストからではなく、実際に本を手にとって選べるようにするために始められた。後には、展示につけるブックリストを作成するという仕事が始まった。しかしこのようなブックリスト作成は初めてのことでない。この書店を開店した当初1916年からバーサが「少年少女のための本—購入お薦めリスト」を作成していたのは前述したとおりである。さらに1924年からは子どもの本の専門雑誌『ホン・ブック』を刊行していた。これらの仕事が後にバーサ・マホーニーとエリナー・ホイットニーが編纂し、メイ・マッシーが出版した『黄金の国』へと大成されていく。

### 3. 『子どもの本のなかの黄金の国』

『黄金の国』は先に記したとおり、石井桃子が教文館で偶然見つけ後に日本の子どもの文学の成長に寄与した本であり、『本・子ども・大人』の著者で世界的に著名なフランスの文学史家ポール・アザールが絶賛した本である。800ページにわたる本の紹介と批評であるが、書店経営のかたわら、バーサとエリナーは1927年7月にこの仕事に着手した。そして1929年の初めに出版されるというまさに超人的な技であった。しかしバーサ・マホーニー自身が作成していた「子どものための本—購入お薦めリスト」は1922年までに4刷を数え、1924年にはエリナーと共にその補遺も出していた。なぜ新たなブックリストが必要であったのだろうか。彼女たちはどんなに改訂を重ね、補遺を出しても、これまでのブックリストではうなぎ上りに増加する子どもの本の出版には対応できないと考えたようだ。またエリナーの回想からは、彼らは単に本のタイトルと注釈をつけるだけではもはや満足できなかったことが窺える。

私たちは単にタイトルを並べて注釈をつける以上のことをしたいと思いました。一番最初の本、ホーンブックから輝かしい今日に至る子どもの本の物語を語りたいと思ったのです。著者や挿絵画家の図書目録をつけて、花火のように詩や散文から好きな引用を投げ入れて。(Field, "Chapters from Horn Book History--VIII," p.329-330)

エリナーはこの仕事は真に喜びにあふれ、自分たちが扱っている本との生き生きとした出会いを可能にしてくれたと語っている。<sup>(6)</sup>「私たちの仕事が退屈でつまらなくなったことは一度もありません。私たちは仲良く調和して、お互いの考えやアイディアに敬意を払いながら仕事をしました。」この原稿がダブルディ社に届いた時、さすがに冷静沈着なメイ・マッシーも動揺したらしいが、「このような本が印刷機を通るのを見たことがない」と言いつつも、その真価を認めて原稿の一部を除いて『子どもの本のなかの黄金の国』を出版した (Field, "History--VIII," pp.329-330)。しかもこの本はつつましくも、「少年少女のための本一購入お薦めリスト」の第5刷として出版されたのである。『黄金の国』は、パーサに財務管理を教え、「少年少女のための本屋」をその誕生から支援した女子教育労働組合のヘレン・パース夫人に捧げられている。この本は出版されるとすぐに、文学界でも教育界でも歓呼の声をもって迎えられた。このような本はかつて出版されたことがなかったのだ。本をよく知っており、さらに子どもと直接に接している人々の手になるブックリストであることに加えて、編纂者が本と子どもに関わることで感じる喜びが、この大著には溢れていたからだ (Ross, p.96)。アザールは本書に触れた驚きを次のように記している。

いま、わたしの目の前には、すばらしいカタログ、『子どもの本のなかの黄金の国 (*Realms of Gold in Children's Books*)』がある。これは上品な体裁で絵まではいっており、八百ページにわたって、原典であれ、翻訳であれ、子どもが読みたいと思う英語で書かれた本はすべて紹介されていて、なかには要約までのっているものもある。…まことにアメリカという国は特異な国である。アメリカでは万事につけ、けちくさい節約などはしない。こと本に関しては、特にそうである。安い本を作っても軽蔑されないし、そうかといって、安い値段で本を仕上げるのが、出版の決定的な条件だなども考えられてもいない。またこの国の人びとは、粗末な紙や、使いふるした活

字や、色の薄いインキや、不完全な製本や、不体裁な誤植などは好まない。そして彼らは、美しいものを愛する気持ばかりでなく、美しいものに親しむ習慣を若いころからつけようと努めている。(アザール、pp.129-130)

『黄金の国』で扱う年代は1400年代からの500年にわたる。子どもの本の500年を概観した後で、1～4歳、4～8歳、8歳以上の年齢に分け、それぞれ「子ども部屋のための本」、「子どものための本」、「少年少女のための本」と見出しをつけている。この3部の中でももっとも充実しているのが、第3部であり、神話や昔話、フェアリーテール、自然、科学、芸術、歴史、現代社会、学校生活、伝記、文学、などのカテゴリーに分類して紹介している。著者名、書名、出版社名、値段と簡単な本の紹介の他に、項目によっては長い説明を加えたり、著者を紹介したりしている。例えばランドルフ・コールデコットの絵本は次のように紹介されている。

単純さ、陽気さ、親切、ユーモアと、ある種の愛想のよい温かさがコールデコットの絵本には輝いています。「ジョン・ギルピン」や「おいで若い娘と息子たち」や「3人のゆかいな狩人」や「かえるくん、恋をさがしに」でも他の何でも、ページをめくると愉快で幸せな気持ちになってくることでしょう。挿し絵から、この画家が田舎や農場の生活を愛していたことがわかり、動物が、なかでもウマが好きで、確かにブタにはとても親近感をもっていらしいことがわかります。(p.26)

このようにユーモラスに作者の特徴を端的に紹介した後で、コールデコットの作風と彼の生涯を紹介している。この本が特に神話や伝説に多くのページを割いているのは、神話や昔話が特に子ども達に訴える力が強いことに加えて、アメリカという国の成り立ちも影響しているのであろう。多くの移民が移住してきたアメリカは、昔は「人種のるつぼ」と呼ばれていたが、現代では「サラダボウル」と呼ばれている。民族間の溶融というよりは、多文化共生という方向性がこのような表現にも見てとれるが、いろいろな歴史や文化的背景を背負ってアメリカにわたって来た人々が自分たちの祖国の言葉や価値観、生活文化を継承するために絵本は手渡されてきた。なかでも神話や昔話には民族の精神性や価値観が色濃く反映されていると言える。島は1960年代をふり返り、移民が祖国からもちこんだ絵

本の価値を次のようにまとめている。「当時は古書店の隅にしばしば、いろんな国で出版された絵本が積んでありました。それは移民たちが故国から最後の手荷物の中に残して持ち込んだ、かけがえのない愛蔵品のようでした。また、情操教育のためではなく、子どもが故国の言葉を忘れぬよう、あるいは、社会のルールが異なる新天地で生き延びるための教科書、そのものでもありました。」<sup>(7)</sup>このような本をかばんに入れて渡って来た親世代に育てられた第二、第三世代、あるいは時代が下ってナチスを逃れてアメリカに渡った人々が絵本の作り手となっていったのである。そのような作家をマッシーのような編集者が発掘し、その本を図書館員や書店員が子ども達に手渡し、中でもジョーダンやムーアのような経験豊かな図書館員が批評をとおして作家や挿絵画家、編集者、親を育てた。バーサ・マホーニー・ミラーは書店員として子ども達に本を届ける一端を担うだけでなく、詳細な選書リストの形をとった書籍や児童書専門雑誌の発行をとおして、親を含め、子どもの本に関わる人々に選書の基準とインスピレーションを与えていったのである。

#### 4. バーサ・マホーニーの思想を育てたもの

バーサは70歳になってから子ども時代を振り返って次のように述べている。「もし誰かに子ども時代が私にもたらした最大の影響は何だったかと聞かれたら、『センス・オブ・ワンダー』と答えるでしょう。この言葉で私が意味するのは、ある雰囲気、心のありようです。それはひとりの幼い子どもにとって人生を意味あるものにし、今日に至るまで尽きることのない興味ときらめきを与えてきました。」(From a Memoir written when she was seventy, Ross, p.6)。レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』がその死後出版されたのは1965年であるが、1956年にそのもととなる作品が雑誌に掲載されている。(カーソン、p.57)。バーサが70歳になったのは1952年のことであるから、カーソンよりも前に「センス・オブ・ワンダー」という言葉を使っていたことになる。「センス・オブ・ワンダー」とは、自然の美しさや神秘に目を見はり不思議と思う感性を指す。何かを感じる感受性というのは、生まれつき備わっているものであったとしても、他の能力と同じく経験によって育ち、研ぎ澄まされていくものである。感じる力と何らかの媒体に表す能力とは別物である。表現できないからと言って、感じていない訳ではない。そのような子どもの感性にバーサは気づき、自身の子どもの時代の経験を忘れずにいたのではないだろうか。バーサは「不思議と思う感性と畏敬の念は子どもの特権であり、

「子どもが理解できる概念のみを与えるべきだと言うのは間違いである。子どもの魂は、それが理解できないものごとについて不思議に思うことで育つのである」と言う。<sup>(8)</sup> 他方、「不思議と思う感性」はある意味で人間を謙虚にしてくれる感覚であろう。自分の知らない世界があること、自分には説明がつかないものがこの世には多く存在していることに眼を開かれた子どもは幸せである。このような経験が、その人の一生残る経験であることは先のパーサの回想で明らかである。同時にこのような感性が育つのは、子どもの頃であるというのも首肯できる。大きくなればなるほど、感じることもより考えることに忙しくなり、心を一つの感覚に開け渡すのは難しくなるからである。ムーアが本を読むことよりも、まず自然そのものにふれることが先に来るべきであると考えていたのも（金山（1）、p.140）、おそらく根拠は同じであろう。このような点を考えると、子どもの感性を認め、育もうとする大人の役割は大きい。パーサ自身はどのような子ども時代を過ごし、その「センス・オブ・ワンダー（不思議と思う感性）」が育まれていったのだろうか。

パーサ・エヴェレット・マホーニーは1882年マサチューセッツ州ケープアンのロックポートでダニエル・マホーニーとメアリ・マホーニーの長女として生まれる。父方の先祖はアイルランドからの移民で、父方の祖父が1848年アイルランドの馬鈴薯飢饉の際に渡米した。母親が産褥で亡くなったため、ダニエルは苦勞して生計を立てることになったが、メアリと結婚した時には鉄道駅員として働いていた。ダニエルは物静かなタイプであったが、パーサら子ども達には親切な父親だった。読書家で時々子ども達に詩を読んであげることがあったし、時にはお話をしてくれた。よく散歩に連れ出して子ども達が自然を感じる機会を作った。母親のメアリは船長を祖父にもち、ダニエルとは対照的に明るく社交的で楽しいことが好きだった。音楽家でピアノの先生をしており、家には常に音楽があふれていた。子ども達にはよくマザー・グースを唄ってやったり、昔話や創作のお話を語ってやった。しかしメアリは病弱で、パーサは幼いながら母が死んでしまうのではないかとという怖れを抱いていたが、普段のマホーニー家は明るく愛情深く幸せな家庭だった（Ross, pp.9-11）。この明るい母はパーサが11歳の時、38歳の誕生日を迎える直前に亡くなった。こうして子どものころから抱き続けていた怖れが現実となりパーサの子ども時代は終わった。しかし短くても父母の確かな愛によって生まれた子ども時代は、彼女自身の核となっている。

もう一つ幼いパーサの心に傷として残ったことは、自分をとても愛して

くれた母方の祖母と叔母から感じとったアイルランド人やカトリック教徒への差別意識であった。マホーニーという名前を祖母や叔母から聞くことはほとんどなかった。アイルランド人でカトリック教徒を父親にもつバーサの父ダニエルに対する二人の見下すような態度をバーサは感じとっていた。しかし、父親との散歩や父親の静かに子どもの成長を見守り待つ姿勢は、バーサの中の感性を育んだ。ダニエルは子ども達に自然の不思議に目を向けるだけでなく、不思議と思う自分の中の感覚をも見つめることを教えた。バーサは早い時期からどんなに他愛のない経験にも深い意味があることを、そしてその意味を探るには一人にならなければならないことを感じとっていた (Ross, p.16)。父親との散歩を楽しんだマホーニー家の子ども達は、父親からあたりに意識を向けること、ものを見ることを教わった。必要な時には父は、子どもがその見たものから何かを得られるようにとそっとひとりにしておいた。ロス伝記の中で、この親子の典型的なエピソードを紹介している。冬の日の散歩で、バーサはある家の前で黒人の男の子をかたどった馬をつなぐ柱を見つけた。

バーサがこの柱を見るのは初めてだった。そしてこの小さな人物像は、それと同じくらいの大サイズの女の子をたまらなく惹きつけた。彼女はこの像をあらゆる角度からまじまじと見つめ、素材に手で触れ、着ている洋服とその全体像の細かいところまでよくよく調べた。そうしてとうとうこの像を、言うなれば、彼女自身の一部とした。ダニエル・マホーニーは娘がすっかり満足するまで、その間ずっと忍耐強く黙って待っていた。バーサが黒い肌というものがあることを知ったのはこれが初めてだった。(Ross, pp.17-18)

この経験はバーサの中に強い印象を残した。まさに彼女の中の「センス・オブ・ワンダー」を目覚めさせたエピソードと言えよう。大人になったバーサが以下のように述べる時、彼女はこのような経験を可能にした「孤独」な時間と、背後でその「孤独」を可能にしてくれた父親の存在を思い出していたであろう。

子ども時代はその眼がもっとも鋭く、印象がもっとも深く刻まれる時です。真の喜びをもたらす自然との一体感を感じるには、子どもは野原や森の中でひとりになる長い時間を過ごさなければなりません。孤独という言葉は子どもに対して使うには大人びた言葉である



ように見えるかもしれませんが。しかし、(中略) 自分自身の経験から、ある種の孤独は大人同様、子どもにも必要であると知りました。(Ross, p.16)

先に引用した「今日のアメリカの子どもの本」の中で、大恐慌の後遺症からまだ抜け出すことができずにいたアメリカで、子どもの本の中にこそ本当の価値観を見出すことができるとバーサは書いている。それを可能とならしめた要素として彼女が挙げる三つのポイントは、第一にアメリカが移民の国であるという特質、第二に公共図書館内に設けられた児童室の存在、第三に良き編集者の存在である。編集者の寄与という点からメイ・マッシーを紹介し、彼女が出した本にはよい生き方を求める大人も子どもも依って立つことのできる価値観が鮮明に見えるとして称賛している。<sup>(9)</sup> 19世紀までの子どもを教化することを目的とした本作りではなく、アメリカの特質である多様性を認め、純粹に本を読む喜びや楽しみを子どもに与えられるような本作りを目指したアメリカ絵本の黄金時代には、よく生きるという価値観がその底辺にあったことをこの文章から確認できる。子どもの「センス・オブ・ワンダー」に対する敬意に加えて、そのような価値観を踏まえた思想があったからこそ、ただ美しいだけ、ただおもしろいだけでない上質な本が作られていったのだと考えられる。

## おわり

バーサ・マホーニー・ミラーは1949年に『ホーン・ブック』の25年を振り返り、「少年少女のための本屋」の全ての活動の底流にあった考えは、本とは純化された命の記録であり、人生の真髄を伝えるものであり、紹介の仕方によってはこの命が何度でも新しく再生されるものであるという考えであったと述べている。<sup>(10)</sup> この25年で上質な本が作られるようになったものの、本の流通という観点からはまだまだであるというのがバーサの認識であった。<sup>(11)</sup> 出版技術の進化に伴い、多くの本が出版されたバーサの時代は、映画やラジオなどの一般化の時代でもあった。情報技術(IT)が大衆化した現代の私たちが置かれている状況と本質的には似ている状況であった。あつという間に過ぎていく子ども時代は木に例えるならば、その幹の芯の部分を育てる時代である。そのような短い子ども時代に、あふれる本の中からよい本を子どもに手渡していくことを天職としたバーサは、子どもは自分だけの本をもって育つべきであり、さらには本は子どもの精神や霊の成長に欠かせないと考えたアン・キャロル・ムーアと

同じように（ムーア、p.4）、子どもの「頭と身体と霊」の成長を自分の仕事と結びつけて考えていた。今日の子ども達に必要なのは、親や教師や、年長者が手本となって、人生とは個人そして市民として美德と名誉をもって生きるに値する貴重な贈り物であることを示すことであるとバーサは述べる。<sup>(12)</sup> 本がそのような人生を豊かにしてくれるという確信をもって、バーサ・マホーニー・ミラーはその事業に取り組んだのであった。ポストンというアメリカでも最も早い時期に公共図書館に子どものためのサービスを導入した土地での事業であったという点では、多くの理解者を得て有利に進めることができたであろう。しかしながら、その事業の成功には子どもの文学への理解と幅広い知識、そして創意工夫の積み重ねがあったことを本稿では見てきた。

21世紀に入り、日本の書店をめぐる状況は大きく変わった。子どもの本の専門店に限らず、個人経営の書店の減少には歯止めがかからず、どの町にも似たようなチェーン店が見られるようになった。この現象は地方において特に顕著である。これらの書店の児童書コーナーを見ると、絵本はある程度そろえてあっても、その上の年齢層の子どものための本はごく少数である。ある程度の規模の書店、理念をもった書店、児童書専門店以外では、高校生どころか、小学中学年にもなると、よい本を買おうにも店先に置いていないという現実がある。このような問題をどのように解決していくべきか。今こそ、20年、30年後を見据えて、書店員だけでなく、図書館員、出版関係者が知恵を出し合っていく時であると思われる。

---

## 引用文献

- Children's Services Division of the American Library Association, "A Salute to Bertha Mahony Miller," *The Horn Book Magazine*, Vol. XXXV, August, 1959
- Eddy Jacalyn, *Bookwomen; Creating an Empire in Children's Book Publishing 1919-1939*, The University of Wisconsin Press, 2006
- Field, Elinor W., "Chapters from Horn Book History---VIII," *The Horn Book Magazine*, Vol. XXXIX, June 1963
- Fryatt, Norma R. ed., *A Horn Book Sampler; On Children's Books and Reading ~ Selected from twenty-five years of THE HORN BOOK MAGAZINE 1924~1948*, The Horn Book, 1959
- Mahony, Bertha E. & Whitney, Elinor comp., *Realms of Gold in Children's Books*, Doubleday, Doran & Company, Inc., 1929.
- Miller, Bertha Mahony, "Children's Books in America Today," *The Horn Book Magazine*, Vol. XII, July-August, 1936
- , "The Horn Book's Quarter Century," *The Horn Book Magazine*, Vol. XX, September-October, 1949

- Ross, Eulalie Steinmetz, *The Spirited Life; Bertha Mahony Miller and Children's Books*, The Horn Book, Incorporated, 1973
- Whitney, Elinor, "Realms of Gold Including Books," *The Horn Book Magazine*, Vol. IV, August, 1928
- アザール、ポール『本・子ども・大人』矢崎源九郎、横山正矢訳、紀伊国屋書店、1957/1990
- 石井桃子『石井桃子集6 児童文学の旅』岩波書店、1999/2008
- 尾崎真理子「時代の証言者：絵本と生きる 島多代 ②」『朝日新聞』2014年4月30日
- カーソン・レイチェル『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳、森本二太郎写真、新潮社、1996/2014
- 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（1）～アン・キャロル・ムア①～」『敬和学園大学研究紀要』第22号、敬和学園大学、2013
- 、「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（2）～アン・キャロル・ムア②～」『敬和学園大学研究紀要』第23号、敬和学園大学、2014
- 島多代「子どもの本の普及と向上をめざして」『Book & Bread』JBBY40周年記念特大号2014. Oct. Vol. 120、日本国際児童図書評議会、2014
- ムーア、アン・キャロル『Seven Stories High』（資料）金山愛子訳、にいがたグリム発行、2014

- (1) 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（1）～アン・キャロル・ムア①～」『敬和学園大学研究紀要』第22号、2013年、「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（2）～アン・キャロル・ムア②～」『敬和学園大学研究紀要』第23号、2014年。なお前号まではアン・キャロル・ムアと表記していたが、今号からは一般に受け入れられているアン・キャロル・ムーアとする。
- (2) バーサ・マホーニー・ミラーについての研究は、国内では藤野寛之『児童書批評誌「ホーン・ブック」の研究：歴代編集長と協力者1924-2000年』（金沢文圃閣、2013）があるが、それほど詳しく論じられてはいない。
- (3) Bertha Mahony Miller, "Children's Books in America Today," *The Horn Book Magazine*, Vol. XII, July-August, 1936, p. 199.
- (4) 組合での活動については Jacalyn Eddyも詳述している。Eddy, pp. 51-54.
- (5) この展示はフランス留学経験のあるアーティストのマーガレット・マッケラー・ミッチェルが手伝った。この人は後にポール・アザールの『本・子ども・大人』を英訳した人である。
- (6) Elinor Whitney, "Realms of Gold Including Books," *The Horn Book Magazine*, Vol. IV, August, 1928, p.72.
- (7) 尾崎真理子「時代の証言者：絵本と生きる 島多代 ②」『朝日新聞』2014年4月30日
- (8) Bertha Mahony Miller, "Editorial," from *The Horn Book* for January, 1934, Norma R. Fryatt ed., *A Horn Book Sampler*, p.118.
- (9) Miller, "Children's Books in America Today," pp.200-207.
- (10) Bertha Mahony Miller, "The Horn Book's Quarter Century," *The Horn Book Magazine*,

Vol. XX, September-October, 1949, pp.357-358.

- (11) Bertha Mahony Miller, "Twenty Years of Children's Books," from *The Horn Book* for Christmas, 1938, Norma R. Fryatt, ed., *A Horn Book Sampler*, pp.104-110.
- (12) Miller, "The Horn Book's Quarter Century," p.358.